

巻頭言 「生物学的精神医学会」という名称について

村井 俊哉

京都大学大学院医学研究科 脳病態生理学講座 (精神医学)

「生物学的精神医学会」とは不思議な名称である。そのことは、「生物学的眼科学会」や「生物学的血液内科学会」などは存在しないことを考えてみるとすぐにわかる。いろいろオブラートに包まずにざっくり言えば、精神医学史の中のある時代区分において (ざっくり言えば 1945 年から 1990 年ぐらい)、ある理由から (これもざっくり言えば、その前の時代の精神医学の失敗という理由から)、精神医学を医学的 (生物学的) に考えることに対してネガティブな立場をとる諸思想が精神医学のなかで優勢となったが (その極端な場合が反・精神医学)、そのような「反・生物学的精神医学」への反動として成立したのが、「生物学的精神医学」といえるだろう。つまり当学会の成立当初の実態は、(当学会の当時の議事録などを確認したわけではないが、おそらくは)「反・反・生物学的精神医学会」といったところだったのではないかと想像する。

1990 年以降は、歴史全体の大きな流れのなかで、生物学的精神医学が相対的に優勢となった。そしてその後、生物学的精神医学の長期政権が続くなか、今では、「反・生物学的精神医学」から産まれた優れた思想的果実の数々 (バイオサイコソーシャル・モデル、当事者中心の医療など) さえ、生物学的精神医学は自らの思想モジュールとして採用するようになっている。つまり、成立当初は「反・反・生物学的精神医学」というセクト的な色合いを帯びていた生物学的精神医学は、対抗勢力の優れた部分さえも貪欲に取り込むヴァージョンアップによって、今日では、「ザ・精神医学」の地位を確保したともいえる。

このように、生物学的精神医学が、精神医学の片隅を占めるニッチな研究領域から、「ザ・精神医学」へと発展したことは、当学会にとってはこれ以上ない素晴らしい成果といえる。実際、専門医制度を含めた今日の医学教育も、臨床ガイドラインの数々も、ざっくり言えば、生物学的精神医学 (すなわち

「医学モデルに基づく精神医学」) の理念を顕在的・潜在的にその土台に据えることで構築されている。

ただ、未来の生物学的精神医学について考えた場合、生物学的精神医学が「ザ・精神医学」に格上げされたこの流れは、必ずしも望ましいことばかりとも限らない。特に、成立当初の「生物学的精神医学」という言葉の響きが当時の精神科医に与えた「研究推進への気概」という観点ではそうである。医学の歴史を振り返ってみても、本当に優れた研究成果とは、世の常識を覆すものである。バイオサイコソーシャル・モデルをその基礎におく現代精神医学は、言ってみれば常識的な精神医学である。常識的であることはもちろんよいことではあるが、常識の磁場が強すぎると、私たちの独創性は萎縮することになる。

対人関係や社会的要因で生じて当たり前、と多くの人が常識のように感じている事象が、実は、比較的シンプルな生物学的事象で説明できる (生物・心理・社会の多様因による複雑な説明を持ち込まずとも説明できる) ということもありえないことではない。しかし、常識の磁場が強すぎると、そのような発想が、発想する前に摘み取られてしまうことにもなりかねない。最初から多要因を想定しすぎて、「このような当然複雑であってしかるべき事象の解明には、被験者数がいくら多くても足りないし、心理・行動データやバイオマーカも大量の項目を調べなければならない」と考えて、研究を開始する前に足踏みしてしまうこともあるかもしれない。当学会が「反・反・生物学的精神医学」として成立した当初のニッチな研究者集団が (学会成立当初の先人にインタビューしたわけではないが、おそらく) そうであったように、「単純な生物学的仮説を立ててとりあえずやってみる」という姿勢も大切ではないだろうか。そうであってこそ、生物学的精神医学ニアリーイコール精神医学となった時代に、あえて、当学会が存在し続ける意義もあるのではと思う。